あおぞら
JAFA
NPO法人
日本アレルギー友の会
〒135-0002
東京都江東区住吉2-6-5
インテグレート村上3F
TEL　03 (3634) 0865
FAX　03 (3634) 0850
http://www.allergy.gr.jp/
mail j-allergy@nifty.com
郵便振替　00130-6-109985
編集発行人　堀内　繁

日本におけるアレルギー学の最高の場で、アトピー性皮膚炎患者(丸山恵理)が熱いメッセージを語る！

第22回日本アレルギー学会春季臨床大会が、5月8日、9日の2日間、国立京都国際会館で開催されました。メインテーマは「環境とアレルギー」です。両日とも好天気に恵まれ、緑萌える京都の何ともいえぬ清清しい中で、約3000名の方がお集まりになりました。

ここで日本アレルギー学会について、簡単にご紹介します。1952年に設立され、内科、小児科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科などの診療科や基礎医学、薬学領域からなる、会員数9800名を有する大きな学会です。各科の高名な先生方をはじめ、アレルギー専門医（アレルギー学に強い関心と専門知識を持ち、アレルギー臨床経験と実績があり、高い水準でアレルギー疾患の診療を行う能力のある医師を認定）、また若く熱心な医師がアレルギー専門医を目指して研修・研鑽されています。わが国におけるアレルギー学に関する研究発表、知識の交換、アレルギー学の進歩、普及、啓発を図り、そして学術、教育、アレルギー疾患の治療・管理・予防に寄与することを目的として活動されています。

講演中の丸山さん

講演会場で質問を受ける

今大会は大阪医科大学学長の竹中洋先生が会長を務められました。春季は臨床大会と位置付け、学会認定専門医の育成と専門医の質を高めるための専門医間の情報共有に工夫を凝らされました。また、アレルギー診療の現場はもはや医師だけでは成立せず、看護師による患者への説明とフォローアップ、薬剤師による服薬指導などが不可欠とされ、個々の専門性を高めることにより、チーム医療を充実させる試みが始まりました。このことは、今後のわが国の臨床アレルギー学の発展に大きく影響を与えることになり、アレルギー疾患患者にとって、より良い医療が期待できそうです。

さらに、特筆すべきは、本大会と協賛企業（サノフィ・アベンティス）の共催により学会アワーと称する中で、「For the patient ～患者コミュニケーションを考える～」が8、9日の2日間設置されたことです。8日は「お母さん、ひとりで悩まないで『母の会』10年間の活動から～」と題して、NPO法人アレルギーを考える母の会の園部まり子氏が講演されました。

9日には、いよいよ当会の事務局長である丸山恵理氏により、講演「療養相談からわかるアトピー性皮膚炎患者の現状とアレルギー専門医へのメッセージ」が行われました。座長は当会常任顧問の東京逓信病院皮膚科部長の江藤隆史先生です。これに出席するためには整理券が必要で、当日の朝8時から学会場で配布されましたが、9時過ぎには整理券が終了となり、人気の高さをうかがわせました。

講演は大盛況を呈し、会場に入りきれない参加者のために隣の会場にビデオ中継が行われましたが、その会場もいっぱいになり、医師の関心の高さがさらに裏付けられました。

まず、座長の江藤先生より、当会の紹介、40周年記念のアトピー性皮膚炎本の紹介・著者がここにいる丸山であること、丸山が生後3カ月よりアトピー性皮膚炎で苦しんできたこと、そうした中で現在に至り、楽しく生き生き活動している、本日は患者の声を熱く語ってくれるでしょう！と紹介され、丸山恵理氏の登場となりました。

当会が行っている療養相談からわかるアトピー性皮膚炎患者の悩み「かゆみと、皮膚が汚くなるつらさ（自信喪失・劣等感、かくことへの罪悪感・自己嫌悪）、長期にわたる治療の必要性（悪化と軽快を繰り返す→将来への不安、薬を長期に使うことの不安）」、同現状「ステロイド許容派→医師の指示に従って治療、治療拒否派→脱ステロイド・脱プロトピック」、社会生活の阻害・家庭崩壊（ひきこもり・登校拒否・家庭内暴力・就労不能・職場でのいじめ・うつ病等）、次にアトピー性皮膚炎患者が混乱する理由を4つあげ、1はマスコミやインターネットからの情報の氾濫（ステロイドやプロトピックは悪だ、ステロイド漬けの廃人になる等）、2は医師への不信感、医師の言葉（〝アトピー性皮膚炎は一生

7頁下段へ続く

◆目　次◇

ぜんそくQ&A②……(2)
アトピー性皮膚炎Q&A②……(3)
患者会からナースへ……(4)
療養相談の窓から……(5)
顧問の先生からのメッセージ⑨……(6)
……(7)
……(8)